

## 第3章 帰趨からみた支援の効果

### ・・・職業準備訓練からジョブコーチへの効果的移行・・・

第2章の結果から、職業準備訓練におけるセルフマネジメント訓練の結果がその後の職業リハビリテーションサービスに有効な情報をもたらしていることを考察した。そこで、この章では、G障害者職業センターで職業準備訓練を実施した後、ジョブコーチ支援事業を実施した事例から、職業準備訓練におけるセルフマネジメントの向上を目指した支援の結果が、どのような効果をもたらすのかを検討する。

#### 第1節 目的

現在、地域障害者職業センターをはじめとして多くの職業リハビリテーション・サービス機関では、小集団での職業前訓練、職業準備訓練を実施している。また地域障害者職業センターにおいてはジョブコーチ（以下「JC」とする。）支援事業を展開している。

このような職業リハビリテーションサービスにおいて、セルフマネジメント・スキルの向上を図る重要性はすでに指摘されている。例えば石黒ら（1999, 2000）は、職業準備訓練においてセルフマネジメントトレーニングを基礎とした作業指導の構造化を図り、その効果について報告している。

しかしながら、職業準備訓練からJC支援への効果的移行について検討された報告は少ない。そこで、セルフマネジメント訓練のプロセス（表Ⅱ-3-1）を基礎にし、職業準備訓練からJC事業に支援を移行した2事例の経過を通して、セルフマネジメント訓練の効果について支援終了間際から職場適応状況までを追いつき、作業場面や生活場面で感情の揺らぎ（家庭での不満等）が減り、安定して作業に取り組めるようになった経過を報告する。

最後に、職業準備訓練とJC事業における支援の移行状況と職場適応状況を併せて検討し、セルフマネジメントトレーニングによる効果が各支援場面や就労場面でどのように影響しているのか、継続的支援の必要性や効果的支援のあり方について考察する。

表Ⅱ-3-1. セルフマネジメント訓練のプロセス

No	期	ねらい
1	ベースライン測定期	作業手順の理解（正確さは問わない）
2	セルフモニタリング期	正確さ、良・不良の理解の徹底
3	タイムトライアル期	作業ペースの向上と安定
4	セルフマネジメント期	作業スケジュールの自己管理

## 第2節 事例1

### 1. 対象者の概要と職業評価結果

- ・ b-5さん 男性 19歳 軽度知的障害
- ・ 斜視 対象者は養護学校在学中から「メガネを使用しなくても作業に影響はないし、格好悪いので使いたくない」という意識が強かった。
- ・ 養護学校高等部卒業後、訓練校へ進学するが女性生徒への問題を起こし退学した。退学後、岐阜センターにて相談の上、職業準備訓練を受講し就労を目指すこととなった。

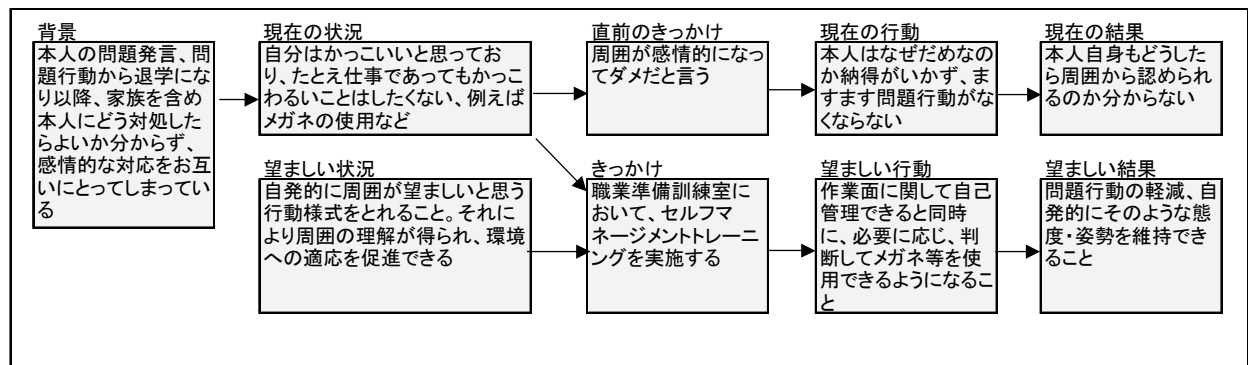


図 II-3-1. b-5 さんの問題行動改善のための機能分析

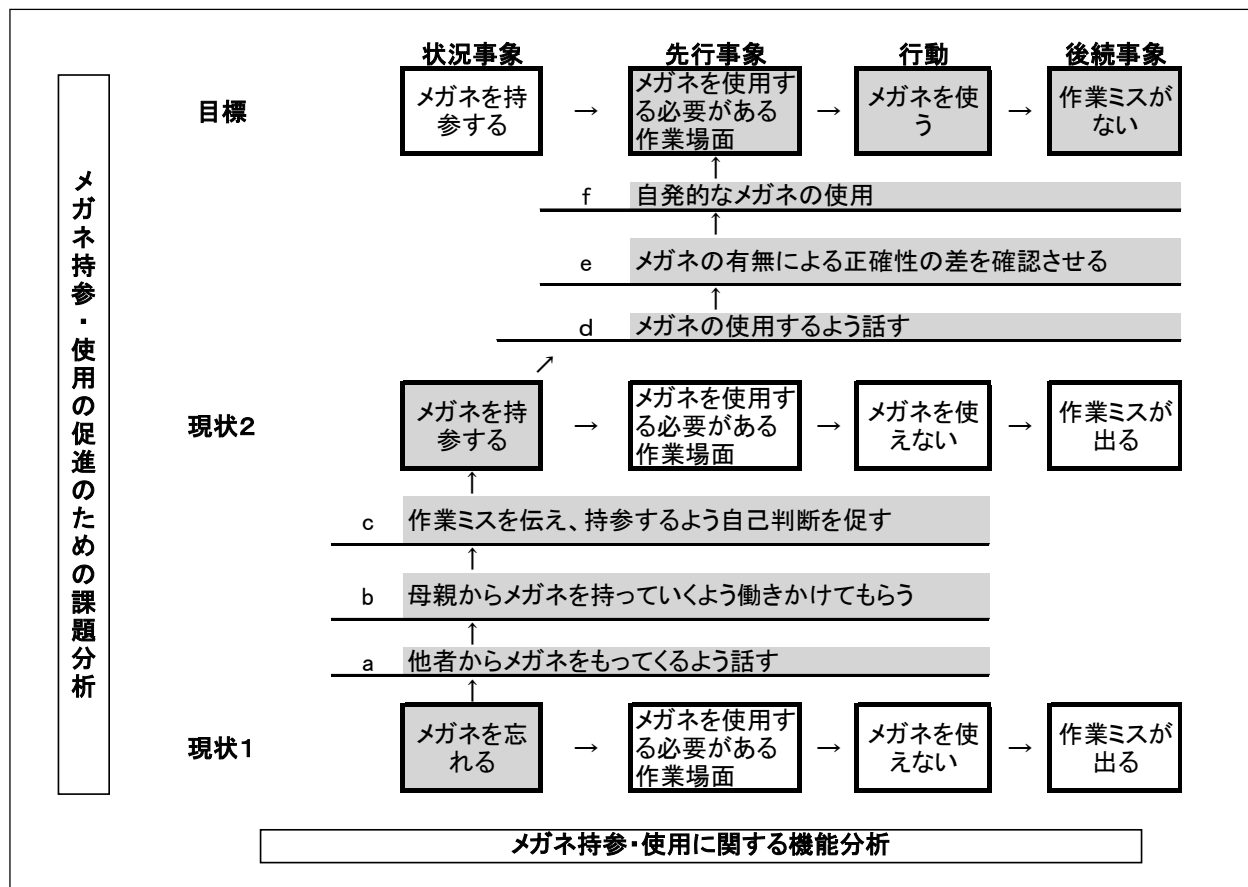


図 II-3-2. b-5 さんのメガネ使用の促進を図るための機能分析・課題分析



【ベースライン測定期】手順の習得はスムーズにできたが、正確性は不十分であった。

【セルフモニタリング期】時間をかければ正確な作業ができるようになった。しかし、作業能率の向上を促すとミスが目立った。そこで、メガネ使用の必要性を本人に説明したが、本人は感情的にも拒否的な態度が続いた。そのため図Ⅱ－3－2に基づき、自発的なメガネの使用を促す計画的指導を開始した。

【タイムトライアル期】10日目よりタイムトライアルに入ったが、作業ミスが頻発した。そのため、メガネを持参し使用する必要性を話し、母親からも働きかけ、メガネを持参させた。

実際にメガネを使うことでミスが減ることを本人に確認させ、自己選択を促したところ、自発的にメガネを使用し、感情的で拒否的な態度がなくなった。

【セルフマネジメント期】16日目には、自発的に目標を設定し自己管理できるようになり、作業に関するセルフマネジメントが可能となった。

【セルフモニタリング期】20日目に、対象者はメガネを自宅に忘れたため、指導員にミスが発生したかどうか、何度も確認した。不安感を払拭するため、セルフモニタリング訓練を再度行った。

【タイムトライアル期】21日目に、自発的にメガネを持参したが、使用せず作業に取り組んだ。その結果、不良品が大量に発生した。その後、自発的にメガネを使用し再び取り組むようになった。

【セルフマネジメント期】22日目に、自発的に「メガネを使用します」と指導員に宣言した。以降、この作業に関しては自発的なメガネの使用が定着した。

この作業課題終了後、新しい作業に移ると再びメガネの使用を拒否した。しかし、作業によってはメガネ使用によりミスを防止できる、という経験は効果的であり、その後も自発的にメガネ使用の必要性を自己判断し、使用するようになった。

### 3. JC支援実施前の状況

初めて知的障害者を雇用するS社にて、JC支援を行うこととなった。

職業準備訓練の実施状況を踏まえ、作業ミスの発生や作業能率上で職業準備訓練時と同様に、何らかの課題が生じる可能性があるかと予測した。そこで、まず、職業準備訓練の訓練結果が般化し、本人が自発的にメガネ使用を始めるか確認する。また、会社から課題を指摘された場合には、メガネを持参させ使用した時と使用しない時の違いを実感させ、母親からの働きかけも行い、本人にメガネの使用を自己選択させていくこととした。

### 4. JC支援実施状況

表Ⅱ－3－2にJC支援の実施状況を示した。

勤務開始当初は、状況に応じた自発的なメガネ使用の般化は確認されなかった。

【勤務25～31日目】「メガネを使用してほしい」と会社から正式に要請があった。そこで計画通り、JCや母親から本人へメガネの持参・使用について働きかけを開始した。

約6日間で、職業準備訓練時に確立した「メガネを自発的に使用する」という自己管理行動が安定し、

その後、作業の若干の変更はあったが職業準備訓練期間に見られた、メガネ使用の不安定化は生じなかった。

職業準備訓練実施時と同様の手続きを繰り返すことで、職業準備訓練時の約1／2の指導期間で、自己管理によるメガネ持参・使用が安定・維持された。

このようなメガネ使用の指導が効果を発揮するに伴い、他の色々な場面においても選択的・自発的な行動が見られた（e. g. 作業姿勢が良くなる、正確性の向上、作業能率の向上）。

## 5. まとめ

本事例において、対象者が自発的なメガネの使用を受け入れ始めた頃から、精神的な安定が図られ、職業準備訓練場面では作業途中でのおしゃべりや感情的な言動・性的発言が減少し、感情面の自己管理ができるようになった。また家庭内でも特に母親と感情的にならずに会話できるようになり、家庭での不満や感情的ゆらぎが減少した。

当初はJ C支援期間中も感情的な発言や性的発言等が起こるのではないか、と危惧されたが、そのような言動は生じず、職場定着を促進できたと言える。現在も職場適応状況は良好である。

### 第3節 事例2

#### 1. 対象者の概要と職業評価結果

- ・ b-7さん 45歳 女性 知的障害 中度
- ・ 母子寮に入寮。不満が多くあり、精神的に不安定になると作業へ安定した取り組みができない。

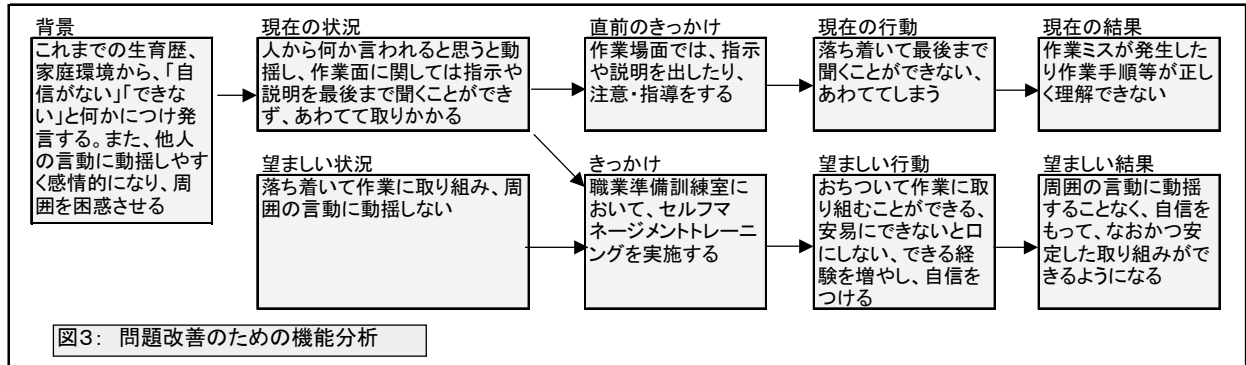


図 II - 3 - 3. b-7さんの問題行動改善のための機能分析

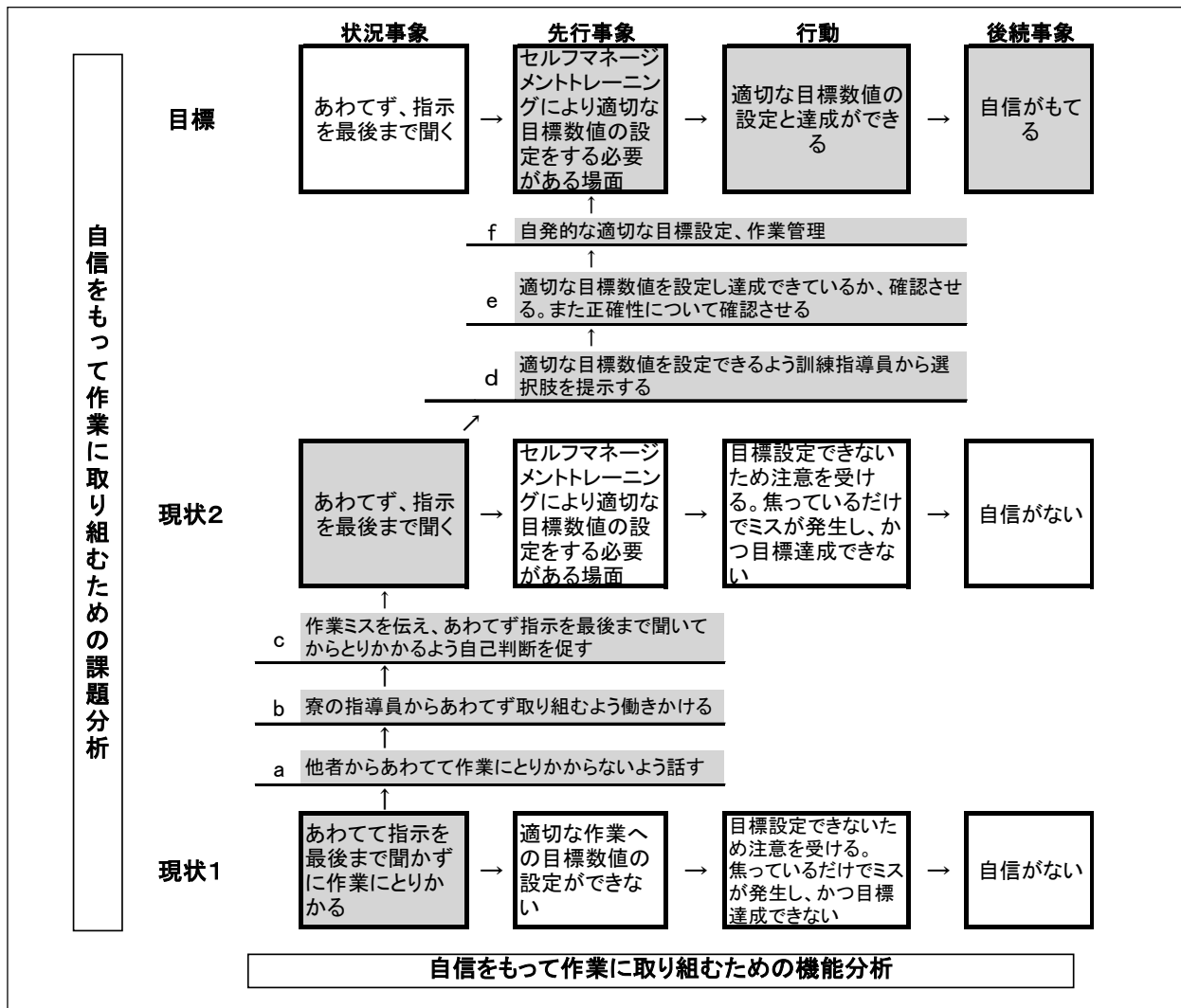


図 II - 3 - 4. b-7さんが自信を持って作業に取り組むための機能分析・課題分析

職業相談・評価で以下の点を確認した。

- 作業面で作業能率は早いものの、部品の扱いなどは雑である。指示を最後まで聞かずにあわてて作業に取り組むため、手順等を正確に理解し作業できないことがある。数処理力が10程度までしかできず、不確実である。
- 場に適した態度・言葉遣いができない。
- 「自信がない、できません」と何事にも取り組む前から否定的な発言をする傾向がある。

職業準備訓練実施にあたり、これらの評価結果を元に、①あわてずに作業へ取り組むことができるようにすること、②正確性を意識した取り組みをできるようにすること、③①と②の課題のセルフマネジメント能力を高め、結果的に自信をもって取り組むことができるようにするという指導目標を定めた。これらの指導目標を念頭に、図Ⅱ-3-3にある機能分析を行い、職業準備訓練作業場面で指導を行うことのできる内容を検討し、それに基づき図Ⅱ-3-4にある機能分析・課題分析を行い、計画的指導を行った。

## 2. 職業準備訓練の実施状況

表Ⅱ-3-3に職業準備訓練での指導・支援の経過を示した。

表Ⅱ-3-3. 目標行動（自信を持って作業に取り組む）に対する指導・支援の経過

			職業準備訓練の実施																										
			表3 目標行動(自信をもって作業に取り組む)に対する指導・支援の経過																										
セルフマネジメント支援レベル	訓練実施/勤務開始後日数		8	9	10	11	12	13	14	15	16	18	19	20	21	22	23	24	25	26	作業開始後日数/JC支援日数								
	作業開始後日数/JC支援日数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	12	13	14	15	16	17	18	JC支援の有無									
	JC支援の有無																												
	支援時間		6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6								
Level3	自発性を高める	f	自発的な適切な目標設定、作業管理																										
Level2	選択肢の提示	e	適切な目標数値を設定し達成できているか、確認させる。また正確性について確認させる																										
		d	適切な目標数値を設定できるよう訓練指導員から選択肢を提示する、数量管理の指導																										
		c	作業ミスを伝え、あわてず指示を最後まで聞いてからとりかかるよう自己判断を促す																										
Level1	他者からの指示	b	他の指導員からもあわてず取り組むよう働きかけてもらう																										
		a	他者からあわてて作業にとりかからないよう話す																										
落ち着いた作業への取り組み			あわてて指示を最後まで聞かずに作業へとりかかることをしない																										
感情面			感情的な安定度																										
作業状況	作業におけるセルフマネジメントレベル変化		MO	MO	TT	TT	TT	MO	TT	TT	TT	TT	MA	MA	MA	MA	MA	MA	MA	MA									
	作業ミスの発生								6	22	13							10	6	2	2	0	4	0	1	0	1	0	
	作業能率(↑向上、→維持、↓低下)								→						↓						↑								
	作業姿勢								b	c	c							b	b	b	a	a	a	a	a	a	a	a	a

評価段階: ○ よいと評価できる △ 不十分 × 拒否的な態度  
 感情的な安定度: A: 安定しており状況に応じた対応ができている \* 26日目より別作業を導入  
 B: 安定してきているが、周囲の感情的な言動に動揺する  
 C: 不安定であり感情的な言動が見られる  
 セルフマネジメントレベル: MO セルフモニタリング、TT タイムトライアル、MA セルフマネジメント  
 作業姿勢: c: 良い姿勢を維持できない、b: 声かけにより姿勢維持、a: 良い姿勢を自発的に維持

訓練開始後8日目より、①②の指導目標についてセルフマネジメントトレーニングを取り込んだ作業課題を設定し、セルフマネジメントの確立に向けた計画的指導を行った。

【ベースライン測定期】開始早々から「自信がない」「できません」と否定的な言動が多く、作業の説明や指示を最後まで聞かずに作業にとりかかるなど、作業に落ち着いてとりくめなかった。寮の指導員からも働きかけを行ったが、発言や行動は変化しなかった。

【セルフモニタリング期】繰り返し作業指導を行い、自分の作業が正確であることを認識させた結果、

落ちついて作業に取り組み始めた。

【タイムトライアル期】不良品数が減少しないため、13日目にセルフモニタリングに戻るよう指示したが、拒否的な態度であった。本人には不良品が多いので、落ち着いて正確に作業に取り組むのが目標であると意識づけた。

14日目頃に、Level 1の課題が達成されたが、作業数を増やしたところ、数量管理と目標時間の設定ができない点が大きな問題となった。そこで、作業に必要な数量管理と、時間の概念について個別指導を開始した。

20日目頃から目標時間の設定が「目標時間>実作業時間」であったのが、「目標時間<実作業時間」となり作業能率の向上が一段と進んだ。

【セルフマネジメント期】23日目には作業ペースが安定し、適切な目標設定、作業量の自己管理ができるようになり、作業場面では常に自信をもって取り組むようになった。それと同時に寮の指導員からは「素直になり、感情的に安定した」と報告された。

### 3. JC支援実施前の状況

初めて知的障害者を雇用するスーパーV社総菜部門にて、JC支援を行うこととなった。職業準備訓練の実施状況を踏まえ、作業ミスの発生や数量処理のミスが職業準備訓練と同様に、何らかの課題として生じる可能性があると予測した。そこで、そのような状況が発生次第、セルフマネジメントトレーニングを意識した計画的指導方法を検討することとした。

### 4. JC支援実施状況

勤務開始当初は、比較的落ち着いて仕事に従事することができた。しかし、種類・量が増え、感情的にも不安定になり始め、職業準備訓練の時と同様に「できません」と否定的言動が増加した。そこで、計画的指導が必要であると考え、日々変化する生産量や様々な生産品目に対応可能な、メモの取り方の指導と活用について計画的に指導することとした。

【勤務17～21日目（JC支援6～8日目）】ミスが多く発生していることを認識させ、作業用メモ帳の持参と活用を促した。同時に寮の指導員からも働きかけを行った。しかし、作業用メモ帳を持参しないため、作業日誌にメモをとらせ、作業メモをとるメリットを認識させ、再度作業用メモ帳の持参と活用について自己選択を促した。

【勤務22～24日目（JC支援9～10日目）】自発的に作業用メモ帳を持参したが、上手く活用できなかった。そのため、作業遂行上必要な物品の一覧表をJCと一緒に作成し、一覧表と作業用メモ帳を同時に活用する方法について支援したところ、自発的に作業用メモ帳を活用し始めた。

### 5. まとめ

職業準備訓練において、計画的にセルフマネジメント・スキルの向上を行ったことにより、落ち着いて



自信をもって作業に取り組むことができるようになった。また、寮内でも精神的な安定が図られた。

J C支援においてもセルフマネジメントトレーニングを意識して、同じ手順を踏んだ支援をメモ帳の活用について行うことにより、短期間ででの活用に至ったと言える。現在も職場適応状況は良好であり、職場内での感情的なゆらぎは自己管理できている。

## 第4節 考察

本研究の2事例から検討すると、セルフマネジメント支援レベルを向上させる支援が効果的であると言え、それは戸田ら（2002）が述べているセルフマネジメントレベルの向上を狙った支援と同様である。

つまり支援内容をセルフマネジメントの視点から質的に分析し、問題となる事象の機能分析と課題分析を行い、セルフマネジメントの視点から支援計画を立てていくことが効率的な支援につながると言える。どのようなレベルで彼らが行動しているのかを見極めた支援計画をたてる基準として、表Ⅱ-3-4のセルフマネジメントレベルの定義をもとに支援方法を検討することが必要である。

また、職業準備訓練において時間をかけて計画的にセルフマネジメントレベルの向上を図ることができるものの、訓練で学んだことを実際の場面に般化しにくい、セルフマネジメントトレーニングを意識した手続きを踏むことにより、職業準備訓練からJ C支援への移行が効果的にすすみ、短期間で達成できる可能性がある。

表Ⅱ-3-4. セルフマネジメントレベル

セルフマネジメントレベル	定義
Level 3	指示されずに自分の職務を自発的にすすめることができる行動が安定しており、変化する状況を随時判断したり、必要に応じて同僚や上司に自発的に相談・調整していく行動がとれるレベル
Level 2	指示により、自分の職務を安定して自発的にすすめることができ、2つ以上の選択肢を掲示した中では、適切な行動選択をしていくことができるレベル
Level 1	集団内で望ましいとされている規範、規則、常識に関連する行動において、選択的要素が無く、他者からの指示で動く行動